

開館10周年記念

ワーナー・ビショフ写真展『Japon』より

～新しい日本と永遠なるもの 1951-52年～

開催趣旨

スイス・チューリッヒ出身のワーナー・ビショフ(1916-1954)はマグナム・フォト(※)会員の写真家で、ロバート・キャパとも親交があり、世界中で撮影した多くの写真を残しています。昭和26年(1951)7月に来日した彼は、翌27年まで日本で過ごしていますが、日本滞在中にも韓国や沖縄などにマグナムの戦争特派員として派遣されています。

昭和28年には日本についての写真集を手がけていましたが、昭和29年5月16日、ペルーでの撮影旅行中、アンデスの谷間に転落し亡くなり、写真集『Japon』は彼の没後に刊行されています。

本展では写真家、ジャーナリストとして来日した彼が、戦後の混乱期が過ぎ、新しい時代に向かおうとしている様々な日本を捉えた作品を紹介します。なお『Japon』に掲載された作品と、滞在中に撮影した未発表作品の中から厳選した60点の他、ビショフが愛用したカメラや日本についてのレポート等も出品します。

※ マグナム・フォトとは1947年(昭和22)、ロバート・キャパの発案で、アンリ・カルティエ=ブレッソン、ジョージ・ロジャー、デビッド・シーモアらが創設し、会員の出資により運営されている、世界的な写真家集団です。

記

【主催】	昭和館
【後援】	外務省、スイス連邦大使館、社団法人日本写真家協会
【協力】	マグナム・フォト東京支社
【会期】	平成21年2月28日(土)～4月19日(日)
【会場】	昭和館3階 特別企画展会場
【入場料】	特別企画展は無料(常設展示室は有料)
【開館時間】	10:00～17:30(入館は17:00まで)
【休館日】	毎週月曜日
【内覧会】	平成21年2月27日(金) 15:00～17:00
【所在地】	〒102-0074 東京都千代田区九段南1-6-1
【問い合わせ】	TEL 03-3222-2577 FAX 03-3222-2575
【交通(電車)】	地下鉄【九段下駅】から徒歩1分(東西線・半蔵門線・都営新宿線4番出口)
	J R 【飯田橋駅】から徒歩約10分
【交通(車)】	首都高速西神田ランプから約1分
【ホームページ】	http://www.showakan.go.jp
【その他】	有料駐車場有り(普通乗用車のみ・1時間200円)

展示構成

1. 占領下の東京 / Tokyo



No.8 小さな花売り娘 銀座 1951年
Flower girl on the Ginza, Tokyo 1951

「ダンスホール」の前では花売り少女たちが立っていた。

—レポート「Tokyo after the Occupation」

ダンスホールの前や、東京のメインビジネスストリート、銀座通りに沿って、小さな花売り少女たちが待っていた。誰にあげるのか知らないが、GIたちは花を買っていた。たまたま道を来た老女にその花をあげるのかもしれない。

—レポート「JAPAN」

2. ジェネレーションX / Generation X



No.39 街に出たミチコ 東京 1951年
Michiko in town, Tokyo 1951

彼女は今日の環境のなかで、本当に幸せなのだろうか、それとも、それしか知らないだけなのだろうか？ 私にはよくわからなかった。次のように言えば、正しい解釈なのかもしれない。日本の若い女性たちは、仮に洋風の生活スタイルがとても気に入っていても、歳をとるにつれ、それは変化して、和風の伝統的生活スタイルへと回帰していく。

—レポート「Generation X」

3. ヒロシマ / Hiroshima



No.43 昭和天皇のご到着を待つ子どもたち
広島駅付近 1951年10月
Waiting for the emperor, near Hiroshima
Station, Oct.1951

子どもたちが何時間も天皇陛下の
通過を待っていた。

—レポート「JAPAN」

4. 永遠なるもの 日本 / Forever Japan



No.60 明治神宮 東京 1951-52年
Shinto priests in the court of the Meiji Temple, Tokyo 1951-52

ワーナー・ビショフ略年譜

1916	4月26日、チューリッヒに生まれる。医薬品会社に勤める父親の転勤に伴いドイツのヴァルツフトへ越し、小・中学校時代をここで過ごす。
1932	学校に満足せず、チューリッヒの美術学校へ転入。1年後、ハンス・フィンスラーが創設した写真学部の生徒第2号となる。フィンスラーに影響を受け、自然の中のフォルムや生物などの写真を多く撮る。
1933	学位を取得し、兵役を経た後、チューリッヒに独自の写真およびグラフィック・アート・スタジオを開く。雑誌やポスターなどの為にファッション写真を手掛ける。
1946	ベルリンとウィーンに滞在。夏にはスイスの救済団体の取材で、イタリアへ赴く。ミラノで将来の伴侶、ロゼリーナ・マンデルと出会う。秋から翌年の春までギリシアで過ごす。
1949	ロゼリーナと結婚。英国で「ピクチャー・ポスト」誌、「オブザーバー」誌などの仕事をする。「マグナム」のメンバーになる。
1950	イタリア、パリ、英国、アイスランドをまわる。雑誌「エポカ」「イラストレーテッド」などの仕事を手掛ける。長男マルコが生まれる。
1951-1952	マグナムの仕事で、インドへ渡る。ビハールの飢饉が「ライフ」に掲載され、国際的評価を受ける。7月、東京へ飛び、1年余りを過ごす。その間に、韓国、沖縄などに戦争特派員として派遣される。1952年春、香港に渡り、夏には「パリ・マッチ」誌の特派員として、インドシナ(当時)へ赴く。年末、スイスへ戻る。
1953	日本についての写真集を手掛ける。(1954年発行。)「ドウ」誌で、「極東の人々」特集。同じテーマの写真展が、チューリッヒで開催される。秋にはアメリカへ渡る。
1954	春、ロゼリーナと2人で、「南米豪華ツアー」と銘打っての旅行に出かける。マグナムのプロジェクト、「いま、女性は」シリーズの取材も兼ねていた。ロゼリーナは途中、メキシコ・シティーからスイスへ帰国。ワーナーはそのままパナマ、チリ、ペルーと旅を続ける。5月16日、乗っていた車がアンデスの谷間に転落し死亡。9日後、次男ダニエルが生まれる。

※ スイス建国 700 年記念写真展「ワーナー・ビショフ 1916-1954」図録より一部抜粋

イベントの開催

会期中、下記の日程でイベントを開催します。

ギャラリートーク

特別企画展会場内で、ご子息マルコ・ビショフ氏に父ワーナー・ビショフについてお話しいただきます。

平成21年3月29日(日) 14:00~15:00

展示解説

平成21年3月21日(土)、4月4日(土) 14:00~ 45分程度

問い合わせ先：昭和館学芸部 03-3222-2577

担当：新城・渡邊